

### 第3節 常盤構内の立会調査

#### 1 工学部尾山宿舎擁壁取設等に伴う立会調査

調査地区 工学部構内 尾山宿舎

調査期間 昭和60年10月18日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約65m<sup>2</sup>

調査結果 尾山宿舎は工学部キャンパス正門の南西約 300mに位置する工学部職員合同宿舎である。昭和59年度、北東端での排水管布設に伴う立会調査の際、宿舎敷地より約 2 m 高い北側の畑地の遺物包含層から中世の土師器を採取しており、同宿舎内での後世の削平状況から推して南半部に遺物包含層ないしは遺構の埋存する可能性が推察された。

今回の調査はその南端部、民有地との境界の崖面での擁壁側溝および鉄製フェンスの改修および新設に伴うものである。

東半部では、宿舎敷地の現地表下約 30~40cmの攪乱土直下が岩盤となっており、地山が大きく削平を受けていた。しかし、西半部では約 240cmまで攪乱土の堆積が見られ、この部分での地山の大きな削平は認められなかった。

したがって、同宿舎敷地の造成工事前の地形は南西部が谷になっていたことを考えあわせると、今後はこの南西部を中心とした地域での調査が必要となろう。(河村)

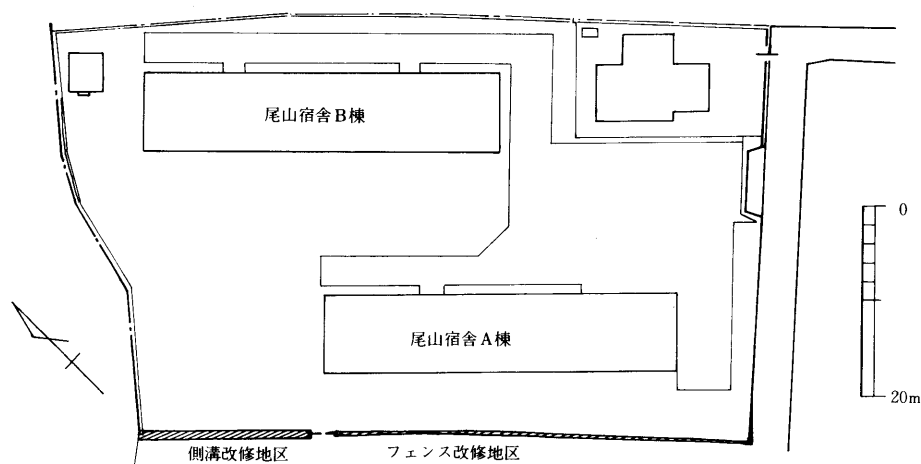


Fig. 46 調査区位置図

## 2 工学部受水槽総改修に伴う立会調査

調査地区 工学部構内

調査期間 昭和61年1月27日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約1.5㎡

調査結果 調査地区は工学部キャンパスの北端部中央にあたる。同キャンパスでは昭和58年度に校舎および図書館増築にともない二地点で試掘調査が行なわれているが、両地点とも構内造成等による後世の削平が著しく、南半部では過去に遺構、遺物包含層が存在していたとしてもすでに消滅してしまっている可能性が高いものと判断された。

しかし、北半部、とりわけ北端中央部付近では、北および北西に向かって開く小規模な谷が存在しており、現在の野球場の大部分はこの谷を埋積したものであるという。したがって、今回の調査地域付近はその谷の貫入する小丘陵の頂部あるいは基部ないしは谷頭付近にあたるものと推察された。

調査は、新営される受水槽タンク約60㎡の基礎部分のうち三箇所について、工事基底面である現地表下約60cmまで土層の堆積状況を観察した。その結果、約10～15cmの腐触土の下位に淡灰色の旧耕土混じりの置土（攪乱土）が約25～50cm堆積しており、その直下が明橙色土の地山となっていた。また、遺物も近代以降の土器が若干出土したのみで、近世以前に遡るものは認められなかった。

したがって、この地点は谷頭部分にあたるものではなく、丘陵にあたる旧地形の上層がすでに多少なりとも削平されている可能性が高いものと考えられる。

(河村)

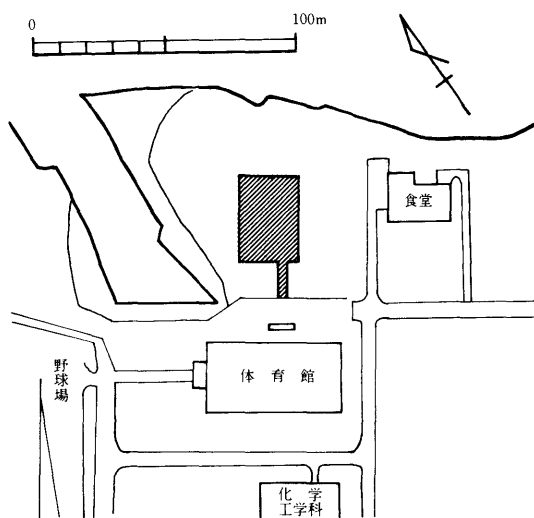


Fig. 47 調査区位置図